

妹は、ダンスは全くの初心者だったが、美沙より高い運動神経を持ち合わせていたし、容姿もなかなかのものであった。

「信行さんのダンスは競技なのよ。お遊びのつもりじゃだめよ」

美沙が強く言い含めていたからか、玲子は真剣に取り組み始めた。もともとの素質もあったのか、めきめきと上手くなって、信行とはベストカップルになっていった。

ダンスの仲間が、美沙にいろいろのやつかみや中傷もあったが聞かぬ振りをした。どこの世界にもあることだし、そういうことをする人はいるものだとな納得していた。美沙の気質の中には、

物事にはこだわらない大らかさがあったのだ。

「あなたのだんなさん、今、若いきれいな人と踊っているわ。知っているの」

夫の相手が美沙の妹と知らないのだ。陰湿な嫌がらせの電話を掛けてくる人さえいた。むしろ可笑しかった。

その頃の美沙は親に手助けをしてもらってはいても、仕事も子育ても一生懸命だったので、つまらないことを詮索するゆとりなどもなかった。

夫と妹のダンスの練習時間が長くて、遠くへと競技試合に出かけても、美沙は一度も気をもむことはなかったし、全てを理解しているというほど大げさなものでもないが信頼という

安心感を持っていた。この人に限って

と心のどこかでたかをくくっていたのだろうか、いや若かった夫婦二人は、間違いなく同じ方を向いていたし、美沙は夫の信行をこの上なく愛していた。

夫が家で、大きくもない鏡を前にして、シャドウレスンなどしていると、応援したくなるほど見とれていたのだ。

夫と妹のカップルバランスもますます磨きがかかってきていたようだ。夫は目標だったインストラクター資格を取って、いよいよプロテストでも受けようと考えていた矢先に、妹の玲子が倒れ、半年の闘病の末、

二十八歳で死んでしまった。

予想もしてないことだった。何の兆候もなく突然立つことさえもできなくなってしまった妹。医師の診断は進行性筋萎縮症だったが、直ぐに命を落としてしまうほど切迫したものは

は思えず、いつかは完治すると期待をもつての治療だったが、妹は死んだ。

その時の夫の喪失感美沙にも手に取るようにわかっていたつもりだが、妹を失ってより深い哀しみの中にいた美沙には、夫の喪失感以上に、自分自身の重たい気持ちを受け止めるだけで精いっぱいだった。

「もう踊れないよ。玲子ちゃんに悪くて」

夫は確かにそう言つてダンスを絶つた。以来踊つていない。もう二十年も経つていた。

プロまで目指すほどダンスが好きだったのに。パートナーの突然の死はそれをも断ち切るほどの衝撃だったのだろう。

ダンスを止めてしまったことも、不思議とさえも思わなかった。美沙の哀しみを一緒に抱きかかえてくれただけだと思つていた。パートナーが妹だったのだから、当然だと理解していた。

美沙は今さらながら、何事も自分本位に判断してしまふ自分に気づいた。

あの時、夫の本心は一体何だったのだろう。もしかしたら。

夫は将来の職業とまでダンスに情熱を傾けていたはずだった。

あの時のダンスシューズはどこへいつてしまったのだろう。あれ以来見たことがない。そして、家の中でダンス音楽が流れることもなくなった。

よくよく考えてみれば、夫の口から玲子の名前が出ることもなくなつていた。そう言えば、口数が少なくなつてきたのもあの頃からではなかつたらうか。

死んでしまった玲子を夫はどう思つていたのでらう。

生暖かい空気は、昼から夜に変わつてきていた。美沙は日が長くなつてきていたことさえ忘れて

しまつていた。気持ちを切り替えるように、大きく深呼吸した。いや、それは深いため息のためのものだったのかもしれない。

\*

優等生気取りで長い間生活してきた美沙でも、今日の一人だけの夕飯の支度は億劫だった。

冷蔵庫を覗いてみた。辛子明太子がある。豆腐もトマトも胡瓜だつてある。ありあわせのもので掻き込むようにして夕食を終えた。

写真一枚くらいで気持ちが乱れるなんて馬鹿らしいと思ひながらも、どうすることもできない。

夫に話したらどうだろうと、想像してみる。夫は顔色を変えることもなく、むしろ笑顔で言うか

も知れない。

(俺も玲子ちゃんもあの頃は若かつたな)

いや、もしかすると憤慨するかもしれない。

(黙つて俺の持ち物を探るのか)

夫の持ち物を覗き見したのだ。今更何を悩むのかと、情けない。

美沙には他愛もない日常を阿吽の呼吸で話す律子という友人がいる。三歳年下だが、なかなかのしつかりもので美沙の方が何かと頼つていた。

こんな日は律子を誘つてカラオケにでも出かけ、このモヤモヤした気持ちを振り払おうとも思つたが、電話を掛ける気力さえ湧かなかつた。今日の美沙は律子の明るさについていけそうもない。

もともと美沙は、自分は大らかで物わかりのいい人間だと思っただけ、もしかしたら無意識で演じているだけで、本心は案外小心者なのかもしれない。だからデコボコの歯車がかみ合うように、律子とは波長が合うのだろう。

美沙は律子の何事にも潔いさばさばした性格が好きだ。

「近頃主人の様子がおかしいのよ」

十年ほど前に律子は美沙に打ち明けた。

その二週間後に、律子は離婚届けの用紙を市役所へ提出した。

「私より美人で案外いい人だったのでしかたないかなって。のしまではつけなかったけれどね」

騒ぎ立てることもなく、涙なんかも流さず、胸を張って美沙にわけを話した律子は、夫と別れて生きる覚悟をしたのだ。

一人息子の慶太君と二人で新たな生活への一歩を踏み出したようだ。愚痴なんかこぼさずにいつも凜としている。

しかし、一度だけ、

「浮気をするのは男とばかり思っていたけれど、その男の相手は女だから、世の中どちらが悪いのだろうか、ね。私は後ろ指だけは指されたくないわ」

何気なく言っていたが、それが律子の本音だろうと思う。

「二人でいた時より、独りになったからこそできる楽しみもあるのよ」

そんな風に生きている律子に、さすが今の気持ち、うまく話すことなんてできそうもない。

夫が入院中に、人のものを黙ってみたことを打ち明ける勇氣もない。みつともない自分を見せたくもない。

あれやこれやと考えながら、気だるい夜を過ごした。

ビールでも飲めばと思ったが、それもしたくない。居間で女が一人で酒をあおるといふ姿は想像するだけで身震いがする。かと言って笑い声の満ちたテレビなども見たくないし、哀しい

ものがたり物語や、男と女のお話なんて全くごめんだ。心をえぐられた気持ちのままでは到底寝付かれそうもないと思っていたのに、いつの間にか眠りに入っていた。

眩しい朝の光りに目覚めた。七時を回っていた。昨日の感情は、時が過ぎ朝の光りやにおいに溶き消されたのだろうか、小鳥たちのさえずりが心地よく耳に届いてくる。

今日は土曜日だった。

病院へ行くのは止めておこう。強いて用事があるわけでもない。もう入院して二週間も過ぎていた。洗濯物だって急ぐものはない。

間の悪いことはよくある。こんな日に限って

きたじなり 北隣の自治会長さんがやってきた。背が低く  
こぶと 小太りで腹をゆすって歩く人あたりのいい男だ。

あた 此の辺りの老人会長も兼ねている。

のぶゆき 「信行さんの姿が見えんと思つたら、入院して  
いたんだってなあ。水臭いやないか。ちゃんと言  
つてくれればいいのに」

ないよ 内緒にしていたのだが、病院へ通う美沙を

きんじよ 近所の誰かが見かけたらしい。

たい 「大したことないんですよ。ちょっとした怪我で  
すから」

べんかい 弁解する美沙に、

きよう 「今日、班長が揃って見舞いに行くから、な」

きよう 「今日ですか」

ひるめし 「ああ、昼飯が済んでから行くこうつていうことに  
なつとるから」

しんばい 「ご心配おかけします」

じちかい 自治会の約束事なので無下に断わることもで  
きない。

「わかりました。ご足労をおかけします」

ていねい 丁寧に頭を下げた。

さて さてさてどうしようか。妻の美沙が行つていな  
いわけにはいかなかった。こんな時に限つてと、  
ま 間の悪さに情けなくなった。

きぶん 気分がいろいろと入り混じる。

きのう ふと、昨日の快適だったコミュニティーバスを思  
い出したが、今日は自分の車で出かける方が

つこう 都合がいい、と自分自身に納得させながら美沙は、  
かがみ 鏡の前に座った。

(以上4月30日放送分)